旧　本　店（桑原　実 画）

本　　店

長岡市中心街から信濃川を望む

刊行にあたって

昭和53年12月20日，北越銀行は創業100年を迎えました。これを記念して，かねてから編纂を進めてまいりました『創業百年史』をここに刊行する運びとなりました。

当行が100年という永い歴史を積み重ね，今日の発展をみるに至りましたのは，ひとえにお取引先，株主ならびに地域の皆さま方の温かいご支援、並々ならぬご愛顧のたまものであり，ここに改めて心より厚くお礼申し上げます。それとともに，当行こんにちの隆盛を営々として築いてこられた諸先輩，役職員各位のご努力に対し，深く敬意を表するものであります。

顧みますと，当行の前身銀行である第六十九国立銀行は，明治11年12月20日，戊辰の兵火の余燼の中で，長岡に誕生しました。また，当行の合併母体の一つとなった長岡銀行は，明治29年11月10日，北越鉄道の建設が軌道に乗り，東山油田が脚光を浴びる中で，同じ長岡に開業したのであります。以来，六十九銀行，長岡銀行の両行は，明治・大正・昭和の３代にわたって，多くの変転を経ながら発展してまいりました。この間，県内でも多数の銀行の興亡が繰り返され，そのたどってきた道は険しく厳しいものでありました。

昭和17年，太平洋戦争下のいわゆる「一県一行」の強力な行政指導のもとで，六十九銀行と長岡銀行は新立合併して長岡六十九銀行となり，23年に北越銀行と改称して今日に至ったのであります。そして，幾多の困難を克服しながら，地域に密着する姿勢を堅持し，地域社会とともに成長を続けてまいりました。

創業100年を迎えるにあたり，当行の歩みと当行をはぐくんできた地域経済，地域社会とのかかわり合いを明らかにするため，『創業百年史』の刊行を計画したのであります。本史では，当行の合併母体となった六十九銀行，長岡銀行のほか，両行が合併または買収した銀行およびこれらの銀行が合併した銀行についても，経営史の観点から先人の足跡をできるだけ克明にたどることに努めました。

しかし，戦災などにより多くの資料が焼失し，散逸していることから，十分意を尽くせない憾みもありますが，本史により多少なりとも，当行100年の歩みと長

岡を中心とした中越地方ならびに県内の経済・金融に関するご理解をいただければ，この上もない幸せであります。

本史の編纂にあたり，成蹊大学長朝倉孝吉氏には，監修者として終始懇切なご指導をいただき，また，野村総合研究所相談役五十嵐虎雄氏には，主席顧問として貴重なご教示，ご助言を賜わりました。さらに，行内外各方面の多数の方々から格別のご協力，ご配慮をいただき，貴重な資料を収集することができました。ここに記して，厚くお礼申し上げます。

私どもは，創業100年を機に創業の精神に思いをいたし，この100年の間に培ってきた信念を土壌とし，新しい100年に向かって，「叡智に富み，奉仕に満ち，人間性豊かな」コミュニティーバンクを指向し，「古くて新しい」銀行を標榜するものであります。皆さま方のいっそうのご愛顧，ご支援をお願いいたしますとともに，地域社会発展に貢献する金融機関として，その役割と責任を十分に果たすことを誓い，本史刊行の辞といたします。

昭和55年７月

頭　取　近藤敬四郎

監修のことば

北越銀行が，周到な準備のもとに百年史の編纂に取組まれてから五年の歳月が流れた。その間，頭取の深いご理解と担当常務をはじめ編纂室長，室員の皆さんの真摯な努力により，数々の困難を克服して刊行をみるに至ったことを心からお喜び申し上げると共に，関係各位に深甚なる敬意を捧げるものである。

長岡は，古くから城下町，交通の要衝にあたり，米，織物を中心に商業も盛んであったが，明治維新後も米と織物に石油が加わり，この地方の経済は一層の隆盛をみせた。

明治11年には第六十九国立銀行，明治中期には長岡銀行がそれぞれ設立され，両行ともに隆盛のうちに推移し，当行設立の母体となった。

六十九，長岡両行は，地場に商業をはじめ産業をもつ地方銀行の典型的なものであるので，その行史の編纂は，単に銀行界だけでなく学会からも渇望されていた。

この百年史編纂に当たって，大先輩である五十嵐虎雄氏を通じ，当行よりその監修を依頼されたことは私にとって光栄の至りである。

行史編纂の使命は，日本経済の中における当行の歩みを明らかにし，顧客のご愛顧に応えると共に，先人の労苦に学び感謝し，行員の自覚を高め，併せて金融史的な側面から学会にも寄与することであろう。そのための一つの重要な仕事は，資料の収集であるが，頭取はじめ役員のご理解と編纂室の熱意により，六十九，長岡両行ばかりでなく銀行類似会社をふくめ，多くの前身銀行の資料まで集めたことは，今後わが国の銀行の実態の解明に貢献すると信ずる。

とくに，六十九，長岡両行に合併された多くの被合併銀行の主要勘定の計数を，設立時より合併時まで各期毎に殆んどすべて収集したことは偉とすべきである。従来の銀行史では被合併銀行の主要勘定は，設立時と合併時のいずれかか，あるいは，せいぜい二期，数期程度しかみられない場合が多い。

本文に示されるように，ここに集められた十数行の被合併商業銀行において，総て預金は払込資本金を下回っており，合併された昭和期までそのままの姿で推移したもの，或は，明治期や大正期に預金が払込資本金や公称資本金を上回るようになったものなどがみられた。しかし，いずれにしても，当行に合併された被合併商業銀行の総てのものの運用資金源の中心が，預金でなく払込資本金など自己資本であり，増資と共に貸出が明瞭に増大する事例が示されたこと，同時に，信濃川分水工事で土地買収代金が流入し預金が増大した時，経営者が資金運用難に陥り困惑した事実も示された。また一方において，設立時（明治時代）から昭和６年まで増資も減資も全くしなかった銀行が発見されるなど，従来みられなかったようないくつかの新しい事例が発掘されたことは注目される。

明治期から大正初期までに設立されたわが国の被合併銀行の実体解明，とくに運用資金源の解明に一つの新しい素材＝光を与えたといっても過言ではないと信ずる。これらの事実の発見は，前身銀行の主要勘定やその他の諸資料を丹念に集め，調べた結果得られた成果といえる。

個人の庫（クラ）まで探してこれらの資料の発掘に身を挺された編纂室の皆さんのご苦労と，そのような作業を許された頭取以下役員の寛容さに再び敬意と感謝をささげ，当行の今後の発展を祈り，監修の辞とする。

昭和55年７月

朝　倉　孝　吉

刊行を祝して

昨秋の歌舞伎座で，山本有三晩年の名作「米百俵」が上演されたが，名優幸四郎の好演技と相俟って，多大の感銘と共鳴を呼んだ。また今春，ＮＨＫの大河ドラマ「獅子の時代」では、戊辰戦争における長岡藩の巧妙な作戦と，凄まじい抵抗振りが話題となった。

この長岡に，地域振興整備公団による地方中核都市造りの第一号事業として，長岡ニュータウンの建設工事が着々進行中である。また新しい構想による国立長岡技術科学大学も既に開校され，更に上越新幹線を始め，関越自動車道や北陸自動車道など，長岡を取り巻く基幹交通網の整備進捗もあり，近来長岡に対する各方面の関心が高まりつつある。こういう際に，北越銀行が創業百周年を迎え，銀行発展の背景にある地方経済，地方産業の消長にも多大の力点を置いた百年史を完成されたことは，まことに意義深いものがある。

由来，わが国経済は，明治以来間接金融中心体制であったがために，銀行史は，その背景にある経済，産業情勢に言及しないと，画龍点睛を欠く嫌いがある。この点は，近藤頭取や銀行史のベテランである監修者朝倉教授が夙に強調され，この方針の下に，深見室長始め編纂室の方々が，各方面のご協力を得て，明治期の古い資料まで精力的に蒐集整備されたご努力には，深い敬意を表したい。従来の中間的銀行史などを根本的に集大成した，立派な百年史が誕生したことは，まことに慶賀に耐えない。

一般に，銀行特に地方銀行の歴史は，銀行合併の歴史と言われるように，当行も十数行の前身銀行があったのであるが，最後は六十九銀行と長岡銀行の合併によっている。

大正の中期，私が長岡中学に学んでいた当時は，六十九銀行本店は田舎には珍らしく西洋風にハイカラで，長岡銀行本店は純日本式土蔵風であった。何も知らぬ学生ながら，両行の対蹠的な行風の，微妙な消息を伝えるように感じたものであった。従って両行の合併は，幾多の曲折を経て，難行を重ねたようであるが，時勢の進展と共に，戦時体制下一県一行主義が打ち出されるに及び，合併談が急進展し，しかも合併後の当行は，幸いにも一県一行主義の例外として存続を認められ，ここに百周年を迎えることができたのである。

これには，銀行当局者を始め，市内実業界の有力の方々の，何としても長岡に本店銀行を残したいとの熱意と努力，更に中央における郷土の諸先輩，就中，小原直氏（元司法大臣），山本五十六氏(当時，連合艦隊司令長官）などの並々ならぬご支援にもよると聞く。これら先人の熱意と努力を偲び，本行関係者の一層の奮励が切に望まれる。

この百年間は，波瀾万丈を極めた日本経済の歴史の中にあって，当行業務も紆余曲折を経たが，百年の歴史には，それなりのズッシリとした重みがある。現在は過去なくして存在しない。しかし，過去に捉われては新しい世界は展けない。米国の詩人哲学者 サンタヤナは「歴史から学ぶことを怠る者は，歴史を繰り返えす宿命にさらされる」との名言を残した。この百年史は，当行関係者の温故知新に役立つのみならず，朝倉教授のご指摘のように，学会始め広く江湖の参考に資するところ大であろうと思われる。

長岡市を貫流する信濃川の源流は，犀川と千曲川，これが合流して信濃川となり，越後の沃野を汪洋とひたしつつ海に注ぐ。当行の源流は，六十九銀行と長岡銀行，この二つが合流した北越銀行も，信濃川のような悠揚たる大河に，いつの日かなって欲しい。

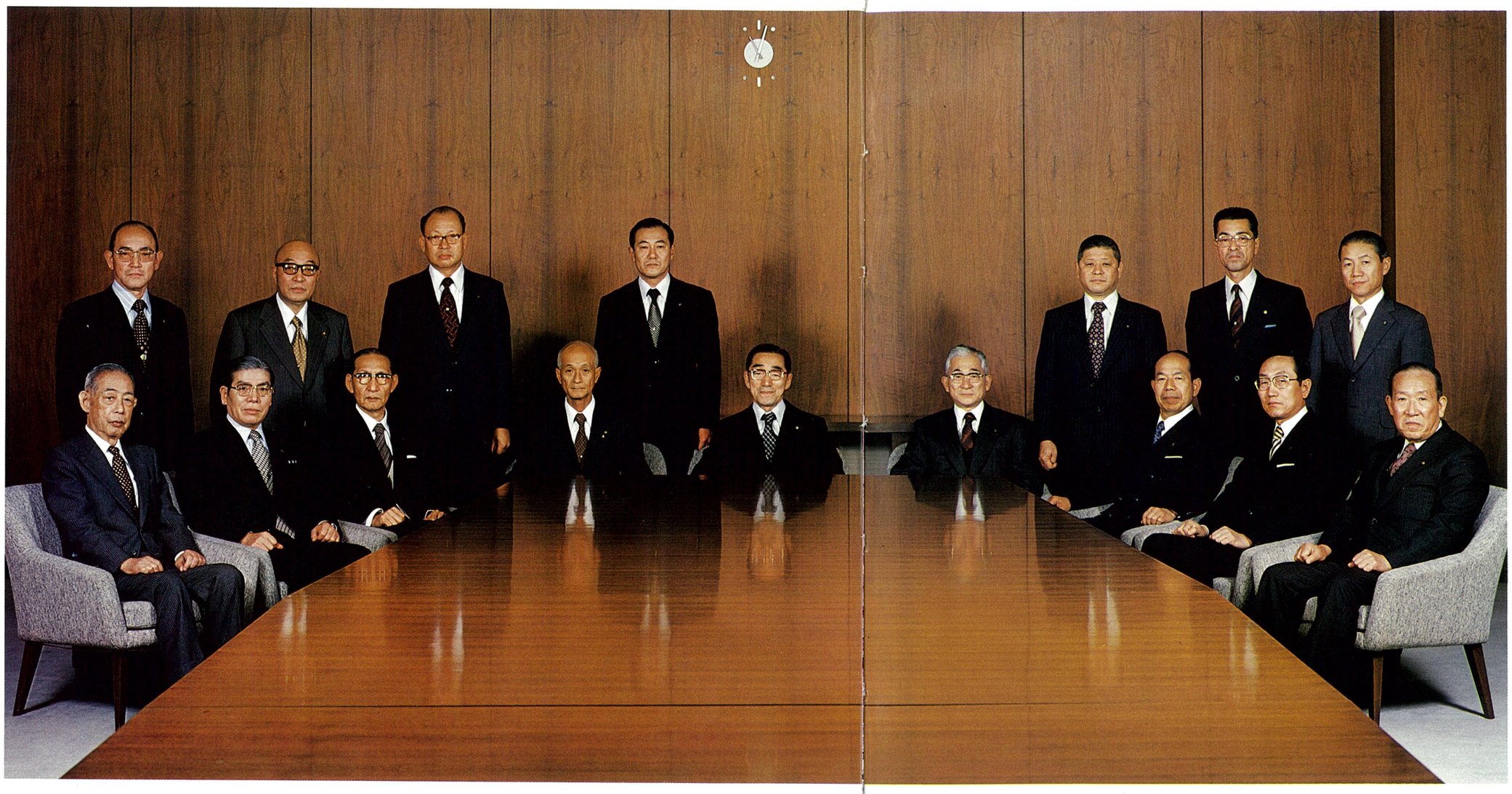
信濃川の堤に立って時に想うのは,「人民は水なり，政事家は船なり，水能く舟を載せ，水能く舟を覆す，政事家たるもの能くこの大勢を察して，運動せざるべからず」という，明治の国士的新聞人陸羯南の名言である。

明治の銀行は金持相手であったが，今日の銀行はピープルズ・バンク，或はコンミュニティ・バンクを指向している。従って，陸羯南の，政事家は舟なりを，銀行は舟なりに，読み替えれば，彼の至言は銀行にそっくりあてはまる。現役の方々は，この辺の消息を身に体して，今後の百年の歴史を，更に輝かしいものにするロマンを持って欲しい。

昭和55年７月

五十嵐　虎　雄

現　役　員

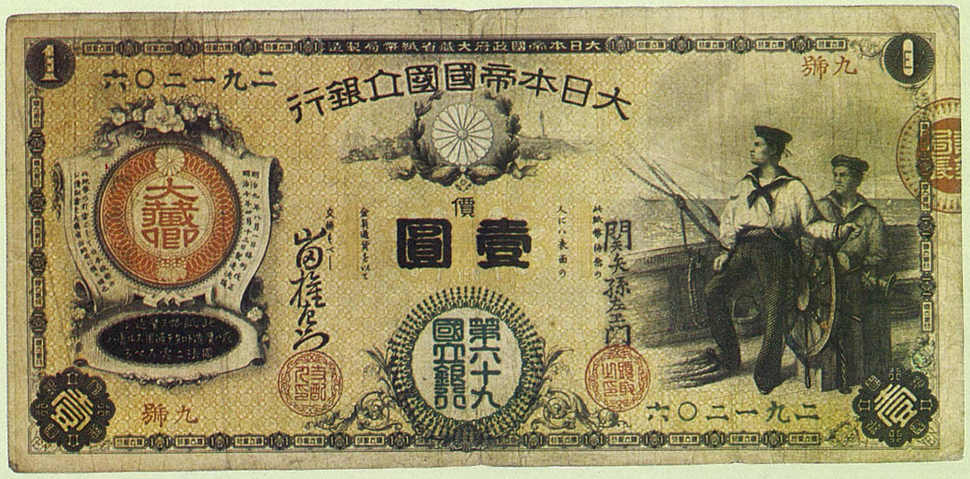


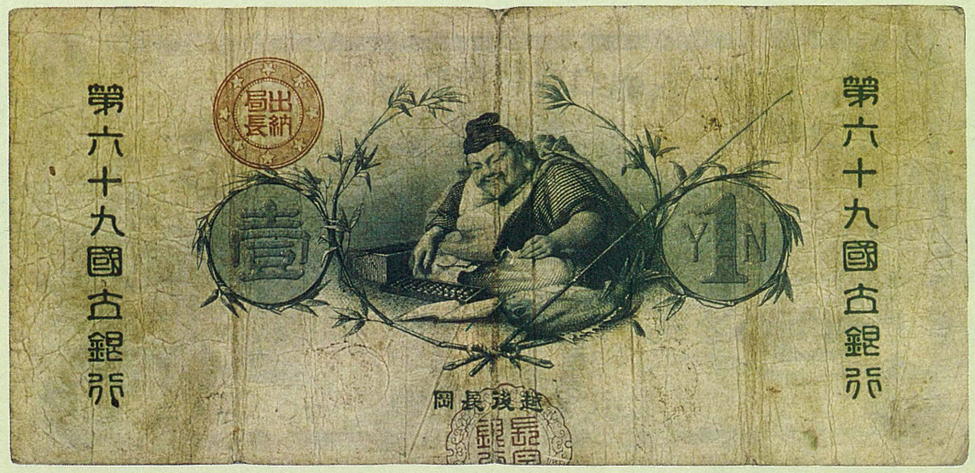
（前列右から）　取締役頭取　近　藤　敬四郎
　　専務取締役　渡　辺　健　三
　　常務取締役　西　巻　義　輝
　　常務取締役　中　山　　真
　　監　査　役　和　田　閑　吉
（後列右から）　取　締　役　田　中　賢　一
　　取　締　役　石　原　昌　松
　　監　査　役　小　林　友一郎
　　監　査　役　大　関　健　一

（前列左から）　専務取締役　上　野　寿　一
　　常務取締役　田　中　国　雄
　　常務取締役　岡　田　富　雄
　　取締役相談役　高　橋　静之助
（後列左から）　取　締　役　船　山　甲子男
　　取　締　役　小　林　久　一
　　取　締　役　長谷川　省　吾

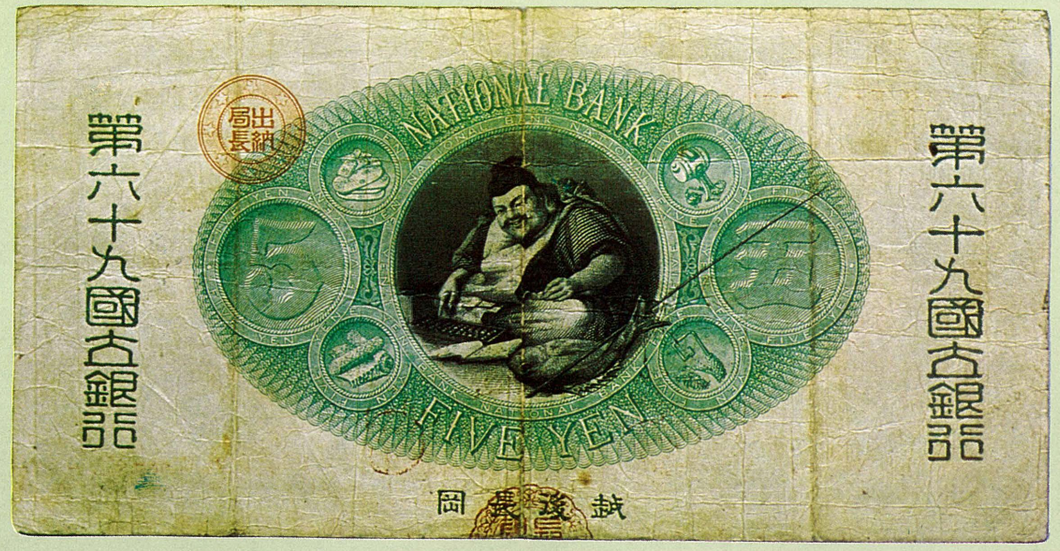
（昭和54年３月31日現在）

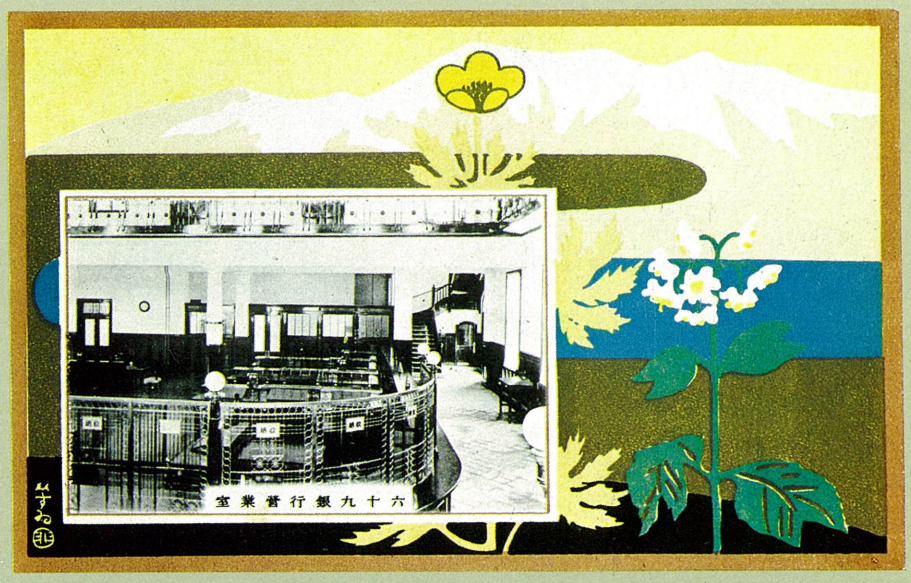
第六十九国立銀行紙幣





明治12年発行の壱円紙幣（表・裏）



明治12年発行の五円紙幣（表・裏）

株式会社六十九銀行新築記念絵はがき（大正６年10月発行）